

プレ・エンカウンター(P R E ・ E N C O U N T E R)

第 1 号

平成 14 年 1 月 27 日

ルツ・エルマー先生の文集より

ルツ・エルマー(1919～2008)

アメリカ ノース・ダコダ生まれ 宣教師。 1949
～1983 年日本で活躍。小西芳之助先生は、月報「よ
ろこび」の巻頭英文のチェックを受けた。山口周三
は 1 年間バイブル・クラスで教わった。

孤独な生涯

彼は名もない村に、農家の女の子供として生まれました。

彼は、別の静かな村で大きくなり、その村で 30 歳になるまで大工の
仕事をしていました。それから 3 年、巡回説教師をしたのです。

彼は 1 冊の本も書きませんでした。何の役職にもつきませんでした。
家族もなく、自分の家もありませんでした。大学にも行きませ
んでした。大都会を訪れたこともありませんし、生まれた場所から
300 キロメートルと離れたこともありませんでした。彼は私たちが
偉大だと聞いて思い浮かべるようなことは何一つとしてしなかつた
のです。

彼には何の後ろ盾もありませんでした。世論が彼に反対するよう
になった時、彼はまだ 33 歳でした。味方は逃げ去り、彼は敵の手に
渡されました。そして裁判でなぶりものにされ、二人の盗賊に挟ま
れて、十字架に釘づけられたのです。彼が死にかけている時に、死

刑執行人たちはその着物をくじ引きにしました。それは彼の地上でのただ一つの財産だったのです。死んだのち、彼は友人の情けによって借り物の墓に収められました。

20の世紀が来ては去っていきました。今や彼は、人類の主要人物であり、その進歩の導き手です。

今までに陸を進んだすべての軍隊も、海をわたったすべての軍隊も、開かれたすべての議会も、君臨したすべての国王も、すべてを寄せ集めてみても、あの孤独な生涯ほどの影響は地上の人生に与えていません。

ルツ・エルマー先生の文集より（２）

最上のわざ

この世の最上のわざは何か
楽しい心で年をとり
働きたいけれども休み
しゃべりたいけれども黙り
失望しそうな時に希望し
従順に平静におのれの十字架をになう
若者が元気いっぱい神の道を
歩むのを見てねたまず
人のために働くよりも
謙遜に人の世話になり
弱ってもはや人のために役にたたずとも
親切で柔和であること
老いの重荷は神の賜物
古びた心にこれで最後の磨きをかける
真のふるさとへ行くために
おのれをこの世につなぐくさり
を少しずつはずしていくのは真にえらい仕事
こうして何も出来なくなれば
それを謙遜に承諾するのだ
神は最後に一番良い仕事を残してくださる
それは祈りだ
手は何も出来ないけれど
最後まで合掌できる
愛の恵みを求めるために
すべてをなし終えたら
臨終の床に神の声をきくだろう
来よわが友よ汝を見捨てじと

（豊岡アヤさんが私に教えてくれたもの）

ルツ・エルマー先生の文集より（３）

足 跡

ある晩、一人の人が夢を見ました。夢の中で、彼は浜べにそって主と共に歩いていました。空から、彼の人生のいろいろな場面が照らし出されました。どの場面でも砂浜には、二組の足跡があることに彼は気づきました。一組は自分のもの、他の一組は主のものです。

彼の前に、彼の人生の最後の場面が照らし出されたとき、彼は砂浜の足跡をふりかえってみました。すると人生の道にそって、何度も一組しか足跡がないことに気がついたのです。彼はまた、それが自分の人生で、非常につらく、悲しいときにあたっていることに気づきました。このことで彼は本当に困惑してしまい主におたずねしました。

「主よ、私があなたに従っていくと決意するなら、いつでも一緒に歩いてあげようとおっしゃったではありませんか。でも私は、人生のもっとも困難な時期には、足跡が一組しかないのに気がつきました。私があなたを最も必要としているときに、何故あなたが私を一人にしておおきになったのか、私にはわかりません。」

すると主がお答えになりました。

「わが子よ、私の大切な子よ、私はあなたを愛しているし、決して、あなたを一人にしはしない。試みと苦しみのとき、足跡が一組しか見えないところは、私があなたを背負った時なのだよ。」